

## 『伍倫全備諺解』に見られる『質問』の編者と佚文について

竹越 孝

### 1. はじめに

李朝時代の大学者崔世珍(1467-1543)が『老乞大』と『朴通事』に見られる語彙を収集し注解を施した『老朴集覽』には、『質問』なる書の引用が極めて多く存在することが知られている。『老朴集覽』凡例の第六条には次のような記述があり、崔世珍が同書をなすに当たり『質問』を大いに参照したことがわかる。

一、質問者、入中朝質問而來者也。兩書皆元朝言語、其沿舊未改者、今難曉解。前後質問亦有抵牾、姑并收以祛初學之碍。間有未及質問、大有疑碍者、不敢強解、宜俟更質。(1b4-8)

この『質問』という書は今に伝わらないため、我々は『老朴集覽』その他の書物に引かれる佚文によって内容の一端を知りうるのみである。本稿では、司訳院において用いられた漢学書の一つである『伍倫全備諺解』の中から『質問』に関わる事項を取り挙げ、この書の編者と成立の経緯、及びその佚文について考えてみたい。

### 2. 『伍倫全備諺解』

『伍倫全備諺解』は、明・邱濬(1421-1495)の手になる戯曲『伍倫全備記』から曲辞の部分を取り去って注音と諺解を施し、漢学の教科書としたもので、司訳院教誨庁所属の訳官十数人が約25年の歳月をかけて編纂し、康熙60年(1721)に刊行した書物である。同書は現在ソウル大学校奎章閣に全八巻五冊の木版本が所蔵され(蔵書番号:奎1456/1457)、その影印には韓國學文獻研究所(1982)がある。いま同本に付された田光鉉の解題により書誌事項を記す: 冊大は34.4×22.5cm、四周単辺、半葉の匡郭は25.4×18.4cm、有界11行、行21字、注音・諺解は小字双行、版心の上下に内向花紋魚尾があり、その間に版心題「伍倫全備諺解」と巻数及び張数が刻される。

本書の体裁は、「○」の記号で漢字本文と諺解とを区切り(登場人物の役柄は○の中に記される)、本文には一字毎に左右二種類のハングル注音を示すとともに、諺解の部分をもさらに小さい「○」で区切り、ハングルによる朝鮮語訳と漢字による義注を記すというもので、他の漢学書と概ね共通し、中でも『朴通事諺解』と全く同じ体裁を取っている。なお、中国語学の立場から本書の語彙と語法を論じたものに福田和展(2001)がある。

### 3. 『質問』の編者

『伍倫全備諺解』第一冊の巻頭には辛丑年（1721）の高時彦序、十二条の凡例に続いて全4張の「引用書目」があり、『周易』より『語録解』に至る234種の書名が収められているが、その中に「四聲通解本朝崔世瑛」、「四聲通攷本朝申叔舟」、「吏文輯覽本朝崔世珍」、「譯語類解」、「語録解本朝宋浚吉」等と並んで、「質問本朝成三問等」（4b1）がある。この記述によれば、『質問』の編纂には朝鮮の成三問を中心とする複数の人物が関わっていたことになる。

成三問（1418-1456）は世宗期（1419-1450）に活躍した文臣で、字は謹甫・訥翁、号は梅竹軒、昌寧の人。世宗20年（1438）に文科及第の後、集賢殿学士として1443年の諺文（ハングル）創製に関与し、『訓民正音解例』（1446）の執筆に参加するとともに、『東國正韻』（1447）や『洪武正韻譯訓』（1455）の編纂、及び『龍飛御天歌』（1447）や『直解童子習』（1453-1455頃）の訳解に携わるなど、申叔舟（1417-1475）と並ぶ大学者であったとされる（より詳しい事跡と業績については姜信沆 1978/1993/2000 を参照）。

成三問が申叔舟らと共にたびたび中国の地を訪れ、漢字音に関する質疑を目的として明代の中国人と交流を持ったことは、小倉（1940）に引くいくつかの文献から窺うことができる（以下の引用はすべて同書による）。まず、申叔舟『洪武正韻譯訓序』（『保閑齋集』卷十五）には、

我世宗莊憲大王留意韻學、窮研底蘊、創制訓民正音若干字、四方萬物之聲無不可傳。吾東邦之士始知四聲七音、自無所不具、非特字韻而已也。於是以吾東國世事中華而語音不通、必賴傳譯、首命譯『洪武正音』、令今禮曹參議臣成三問・典農少尹臣曹變安・知金山郡事臣金曾・前行通禮門奉禮郎臣孫壽山、及臣叔舟等稽古證閱、首陽大君臣諱・桂陽君臣璿監掌出納、而悉親臨課定、叶以七音、調以四聲、諧之以清濁、縱衡經緯始正罔缺。然語音既異、傳訛亦甚、乃命臣等就正中國之先生學士、往來至于七八、所與質之者若干人。燕都爲萬國會同之地、而往返道途之遠、所嘗與周旋講明者又爲不少、以至殊方異域之使釋老卒伍之微、莫不與之相接以盡正俗異同之變。且天子之使至國而儒者則又取正焉。凡騰十餘藁、辛勤反復竟八載之久、而向之正罔缺者似益無疑。（小倉 1940：502-503）

とあり、『洪武正韻譯訓』の編纂事業は初め朝廷内で進められたものの、現実の漢字音との乖離が甚だしかったために、申叔舟らが7-8回にわたり中国を往復して彼地の学者に疑いを質すとともに、来朝の使臣にも同様の質疑を行い、10回以上の改訂と8年の歳月を費やして稿が成ったことが記されている。

また、『増補文獻通考』卷二四五には、

上以爲諸國各製文字、以記其國之方言、獨我國無之。遂製子母二十八字、名曰諺文。開局禁中、命鄭麟趾・申叔舟・成三問・崔恒等撰定。蓋

倣古篆、分爲初中終聲、凡文字所不能通者悉通無礙。中朝翰林學士黃瓚時謫遼東、命三問等見瓚、質問音韻、凡往來遼東十二度乃成。(同上 118)とあり、諺文の創製に際して、成三問らが当時遼東に流謫されていた明の翰林學士黃瓚のもとを訪れて音韻について質問し、その往來が 12 回（他の文献では 13 回とするものが多い）に及んだと記されている。河野（1940）では諺文の創製に中国人が関与するはずはないから、遼東との往來は上の『洪武正韻譯訓』編纂時のことであろうとされているが、それでもこの記事により成三問が申叔舟とともに遼東行の中心をなすメンバーであったことを知りうる。

さらに、『世宗實錄』三十一年（1449）冬の条には、

甲戌、上謂承政院曰：「前此使臣二則館伴亦二、將以金何・尹炯爲館伴。」又曰：「今來使臣皆儒者也、申叔舟等所校韻書欲令質正。」使臣入京後、使叔舟・成三問等往來太平館、又令孫壽山・林效善爲通事。(同上 506)

とあり、また同三十二年（1450）春の条には、

命直集賢殿成三問・應教申叔舟・奉禮郎孫壽山問韻書于使臣、三問等因館伴以見。使臣曰：「是何官也？」金何曰：「皆承文院官員、職則副知承文院事也。」指壽山曰：「此通事也。」鄭麟趾曰：「小邦遠在海外、欲質正音無師可學、本國之音初學於雙冀學士、冀亦福建州人也。」使臣曰：「福建之音正與此國同良以此也。」何曰：「此二字欲從大人學正音、願大人教之。」三問・叔舟將『洪武韻』講論良久。(同上 506)

というように、申叔舟・成三問らが来朝の使臣に対して行った漢字音に関する質疑の模様を伝えている。

崔世珍が申叔舟の手になる『四聲通攷』を節略して『四聲通解』（1517）を編んだことからわかるように、成三問・申叔舟ら『洪武正韻譯訓』の編纂に携わった文臣たちは、崔世珍の一代前当たる先達であり、その崔世珍は『老朴集覽』を編むに際してことのほか『質問』を重視している。よって、『伍倫全備諺解』が『質問』の編者を成三問等に擬することは一定の信憑性があると言ふべきであろう。すなわち、『質問』は『洪武正韻譯訓』の編纂過程における副産物であり、成三問らが中国または朝鮮において、黃瓚や来朝の使臣を始めとする中国人に対して行った「質問」によって成ったものと考えられる。

#### 4. 『伍倫全備諺解』に引く『質問』

『伍倫全備諺解』の義注に引く文献は多岐にわたるが、筆者が検した限りでは、同書が『質問』を引く箇所はわずかに次の三条に過ぎない。以下に『伍倫全備諺解』の本文と『質問』の引用を含む義注を示す（ハングルのローマ字転写は河野式による、カッコ内は巻、張、表裏、行）。

- (1) 賣的是蓮花白竹葉青。  
○蓮花白、『譯語類解』：bis hyi go dAn。清酒、東坡詩：請君多釀蓮花酒。竹葉青、『質問』云：其酒甚清、色如竹葉。杜詩：山盃竹葉春。(一 3a8-10)
- (2) 折杏花一枝插在膽瓶裡。  
○膽瓶、『質問』：瓶如膽形者。『瓶花譜』：膽瓶為書室中妙品、可供插花之用。(一 32a7-9)
- (3) 老兄量用多少盤費。  
○『質問』云：盤費纏繳供給之物、如供給服食應用、金銀財帛之類。取義、源流未詳。(五 44b11-45a1)

以上の三条のうち、(1)の「竹葉青」と(3)の「盤費」については、『老朴集覽』の一篇である『朴通事集覽』、及びそれを引く『朴通事諺解』(1677)の義注と共通する部分がある。いまそれぞれの相当箇所を見ると次の如くである。

- (1a) 「竹葉清酒」：『質問』云：其酒甚清、色如竹葉。(『朴通事集覽』上 1b10)
- (1b) 支與竹葉清酒十五瓶腦兒酒五桶。  
○竹葉清酒、『質問』云：其酒甚清、色如竹葉。(『朴通事諺解』上 3b5-7)
- (3a) 「盤纏」：gir hei ie re ga ji ro bsy non ges。『質問』云：盤費纏繳供給之物、如供給服食應用、金銀財帛之類。今按、盤纏二字取義、源流未詳。(『朴通事集覽』上 13a8-9)
- (3b) 省多少盤纏。  
○盤纏、gir hei ie re ga ji ro bsy nAn ges。『質問』云：盤費纏繳供給之物、如供給服食應用、金銀財帛之類。今按、盤纏二字取義、源流未詳。(『朴通事諺解』上 48b5-7)

これらを参照することにより、『伍倫全備諺解』に引く『質問』の来源を見取ることができる。まず(1)については、『譯語類解』及び蘇東坡の詩がいずれも「蓮花白」について述べているにも関わらず、間に「清酒」という一句が存在するのは奇妙である。これは、『老朴集覽』の見出し語が「竹葉青」ではなく「竹葉清酒」であるために混乱が生じ、「清酒」の部分がこの位置に紛れ込んだものと考えられる。また(3)では、『質問』が「盤費」に言及しているのに「取義、源流未詳」と記すのは不自然である。これは、『老朴集覽』における「盤纏」の項から『質問』の記述とともに崔世珍の按語をも引いてしまったため、後に関係のない「今按、盤纏二字」の部分を削除したものと解釈される。

以上は、(1)及び(3)の部分を担当した『伍倫全備諺解』の編者が、『質問』を直接的に引いたのではなく、『老朴集覽』(ないしは『朴通事諺解』)から孫引

きしたことを物語るものである。このことは(1)と(3)の引用が『質問』云で始まるのに対し、(2)が『質問』で始まる事実とも符合する。考えてみれば、上に述べたように『伍倫全備諺解』には十数人の編者が関与し、成立までに約25年の歳月を要しているのであるから、内部に不統一性が存在するのはむしろ自然なことと言える。

## 5. おわりに

以上、『質問』の編者とその成立に至る経緯、及び『伍倫全備諺解』における同書の引用状況について述べてきた。しかし、この書について考えなければならないことはまだ数多い。例えば、中村(1961)が指摘する『四聲通解』凡例第十六条の「字之無釋者、或取中朝質問之言爲解」(6a5)との関係、山川(1977)が指摘する異本や注が存在した可能性、また田村(1998)が指摘する挿図が存在した可能性、さらには、そもそも『質問』は当初から一篇の完結した書物の体裁をなしていたのかという疑問などである。こうした諸問題を検討するためには、何よりもまず『老朴集覽』を始めとする各書から全ての佚文を搜集し詳細に分析することが必要となろう。今後の課題としておきたい。

### <参考文献>

- 遠藤光暁 1994 「『四声通解』の所拠資料と編纂過程」、『青山学院大学一般教育論集』35 : 117-126 ; 『中国音韻学論集』, 241-252, 白帝社, 2001。
- 小倉進平 1940 『増訂朝鮮語學史』, 刀江書院。
- 韓國學文獻研究所(田光鉉解題) 1982 『伍倫全備諺解』, 國語國文學資料叢書, 亞細亞文化社。
- 姜信沆 1978 『李朝時代 yi 譯學政策 goa 譯學者』, 國語學研究選書 4, 塔出版社。
- 姜信沆 1993 『ハングルの成立と歴史』, 大修館書店。
- 姜信沆 2000 『韓国 yi 譯學』, ソウル大學校出版部。
- 河野六郎 1940 「『東國正韻』及び『洪武正韻譯訓』に就いて」, 『東洋學報』27/4 ; 『河野六郎著作集』2 : 181-220, 平凡社。
- 田村祐之 1998 「『朴通事諺解』翻訳の試み(3)」, 『饕餮』6 : 46-72。
- 中村完 1961 「影印『朴通事上』付金思燁解題」, 『朝鮮學報』18 : 121-132。
- 福田和展 2001 「《伍倫全備記》語彙、語法分析—《老乞大》《朴通事》との比較を中心に—」, 『三重大学人文学部文化学科研究紀要』18 : 97-114。
- 山川英彦 1977 「《老朴集覽》覚え書」, 『名古屋大学文学部研究論集』LXX (文学 24) : 61-72。
- 李丙疇 1966 『老朴集覽考』, 進修堂。